



銃の鑄造所／萩市／セリーヌ・ズレットイ

銃、機関車の模型などを見ることができました。また、恵美須ヶ鼻造船所と大砲の鑄造所を訪れたことは非常に勉強になり、西洋から日本への技術的知識の移転と、<sup>たたら</sup>踏鞴吹き<sup>の</sup>技術で銃を鑄造するなどのハイブリッド技術の重

要な例を見つけました。最後に松下村塾を訪れました。長州藩で進められた西洋式事業のほとんどはここで準備され、長州藩の侍に教えられました。

神奈川に戻る途中、葦山にある葦山反射炉を見るため、伊豆半島で1日過ごしました。反射炉のそばに建てられた博物館には非常に興味深い展示があり、江戸時代の日本の防衛に使用する銃を鑄造する技術的事業のさまざまな側面を明らかにしていました。博物館の職員は親切に相談にのってくださり、この時代に関心があるのな

ら、葦山反射炉の建設に寄与した江川英龍が暮らしていた江川邸を訪れるといいと勧めてくださいました。タクシーで行った江川邸は世界遺産には含まれていませんが、江川英龍が弟子たちとここで行った西洋科学の研究についての興味深い資料がありました。



反射炉／葦山／セリーヌ・ズレットイ

この3週間の滞在は、私の研究にとって非常に貴重なものとなりました。幕末期に他の藩ではどのように西洋科学の研究が行われていたかを知ることができたおかげで、新たな視点から集成館について研究することができました。また、ただちに研究に役立てられる資料を見つけました。特に参考になったのは、長崎で作られたと考えられている模型で、蒸気機関や銃の仕組みを説明するために当時使用されていたものです。

## 日本の無形文化財の保護と伝承の初体験記



劉 洋  
(中山大学)

2018年10月9日から29日まで、幸運なことに訪問研究員として神奈川大学非文字資料研究センターを訪れ、21日間の研究活動を行いました。日本での勉強と研究生活は、私の見聞を増やし、視野を広げてくれました。多分、あちこち赴いて見て回ることは、つまり、「他山の石以て玉を攻むべし」、きっとこれは我々を向上させてくれる良い方法なのでしょう。

せっかくの機会ですので、神奈川大学日本常民文化研究所と非文字資料研究センターの学術資源を大いに利用させてもらい、多くの資料を調べました。また、第70回日本民俗学会にも参加し、中国および外国の専門家の方々の独自のまとまりを持つ正確で明快な考えを

聞くことができ、視野を広げると同時に自分自身の研究の焦点が固まりました。

非物質文化遺産専攻の学生ですので、来日前に指導教員の小熊先生と連絡を取り、日本の無形文化財の保護と伝承の状況を調べたいと伝えました。先生と真剣



相模原市教育委員会  
文化財保護課主任 長澤有史氏と。



藤野歌舞伎保存会 会長 諸角安治氏と。

にスクリーニングし、結局、神奈川県相模原市の藤野村歌舞伎を調べることにしました。先生が事前に、神奈川県相模原市教育委員会生涯学習文化財課主任長澤氏と藤野歌舞伎保存会会長諸角氏と連絡を取ってくださいました。先生がお忙しい中、私の調査がうまく進むように心を砕いて手配をしてくださったことに感激しました。おかげで日本での調査はスムーズに行えました。

相模原市藤野村までは1時間半から2時間ぐらいかかります。高尾山を経由しましたので、電車から見る沿線の景色は素晴らしかったです。藤野に着くと、ちょっとしたエピソードがありました。私たちは山の上の藤野芸術の家に着きましたが、藤野歌舞伎保存会会長諸角氏は山の下で待っていたのです。しかし、山の上から駅までのバスは1時間半後に出る予定です。私とチューターの陳華沢さんは、しかたなく山の上でヒッチハイクしました。「山の下で駅まで乗せていってもらっていいですか」と聞くと、女性がすぐに承知してくれました。また、別れるとき、私たちが感謝の意を伝えると、彼女は「これも何かの御縁ですから」と言ってくれました。あらためて日本人の温かさを感じました。

今回の調査中、一番強く感じたのは人々が文化財を保

護する意識が非常に強いということです。藤野村歌舞伎の保護と伝承に関して、政府の介入はあまりありません。保存会の会員の方に「保護資金はどこから来ているのですか、政府からの援助はないのですか」と聞くと、



藤野村歌舞伎 役者の方と。

「自分の力で

よ。政府のお金は使いたくない。政府の援助金を使ったら政府の考えにより保護と伝承をしなければならない。それは私たちの望む形ではない」との返事でした。保存会の会員は、藤野村歌舞伎の伝承において一銭もお金をもらわないばかりか、入会時には自分で入会費も払わなくてはなりません。個人の出資という尽力により保護がなされているという点に、私は深い印象を受けました。日本の民間の保護における成功体験は、中国にとって大いに参考になると考えています。

せわしない時間はいつも早く過ぎ去るものです。名残惜しい気持ちの中で21日間が終わりました。今回の訪問交流と調査の経験は何だか一杯のお茶のようでした。華やかな色と芳醇な味はありませんが、淡い香りは味わえば味わうほど尽きることがありません。日本でのこの経験に感謝しています。また、日本で助けてくれた先生と友達に感謝します。皆さんが私の心の中に友情の種をまいてくれたおかげで、今後の研究にさらに熱意と自信を持ってそうです。

## 中国及び日本の古文書調査記

王 躍  
(華東師範大学)



2018年11月5日から11月25日まで、私は日本の神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センターを訪問し、交流を行った。今回の訪学のテーマは、中国と日本における古文書の調査研究であった。訪問期

間中に行った主な作業は、日本で収蔵されている中国の古文書及び日本の古文書の調査であり、今後のさらなる研究が待たれる。